活動報告⑤ 宮古市消防団　第 20 分団出動記録

岩手県 宮古市消防団
分団長
中野（なかの）　規男（のりお）

岩手県宮古市消防団第 20 分団分団長中野規男です。よろしくお願いいたします。

発表項目でございますが、５つに分けてございます。正規の被害状況、地震直後の活動状況、被災翌日以降の活動、それから遺体捜索活動状況、その他、以上５項目で、ご説明させてもらいます。

宮古市の位置でございますが、岩手県沿岸ほぼ中央に位置し、本州では最東端に位置する（図 01）。東は太平洋に面しその海岸線にはリアス式海岸の壮大な光景が広がる。津軽石地区は宮古市市街地から約 8 km 南側に位置しております。サケの遡上で名高い津軽石川流域でございます。これが宮古市の位置でございます。

地域の被害状況でございます。宮古市死者 420 名、津軽石地区が 48 名、負傷者 33 名、津軽石地区はゼロでございました。行方不明者宮古市 170 名、津軽石地区 1 名となってございます。

地域の被害状況でございます。家屋等の被害状況でございますが、全体の中から津軽石地区を報告させていただきます。合計で宮古市全壊が 3669 棟、津軽石地区 426 棟。半壊、宮古市 1006 棟、津軽石地区 136 棟。一部破損、宮古市 176 棟、津軽石地区は 57 棟。床上浸水、宮古市 1760 棟、津軽石地区 287 棟。床下浸水宮古市 323 棟、津軽石地区 56 棟。合計で被害数が 6934 棟、津軽石地区はそのうち 962 棟でございます。

宮古市消防団の被害状況でございます。現職分団員数 1307 名でございまして、分団数が 46 分団。殉職者 6 名、行方不明者 11 名。ポンプ被害 7 台、小型ポンプ被害 12 台、防災行政無線被害同報系 59 件

図 01

図 02

図 03

図 04

となっております。

20 分団員の被害状況でございます。分団員数は 23 名。死者・負傷者・行方不明者はゼロでございます。自宅流出が 5 件。全壊 9 件、半壊 7 件、被害なし 2 件でございました。

地震直後の活動状況でございます。津軽石川水門は、河口より約 200m 上流に位置しております。水門の制御機がある遠隔装置制御室は、 1 km 上流に位置されております。この線が 45 号線でございます。

これが平成 19 年 3 月に完成しました津軽石川水門でございます（図 02・03）。岩手県で 2 番目に大きい水門でございます。できてから 5 年目で、最新鋭の遠隔装置を備えた遠隔制御でもって降下できる水門となってございます。水門の高さは 7.76 mですけれども、明治三陸津波の平均の高さで設計された 8.5 mの上屋をもつ水門でございます。

地震直後の活動状況ということで、このように記載してみました。それに対応して、当日の私の行動内容について報告させていただきます。

3 月 11 日、地震発生時、そのとき家に私はいました。地震を感じ津波を想定し、車で屯所へ向かいました。消防ポンプ車には分団員が乗車し、屯所で待機しておりました。まずポンプ車に乗りまして、津軽石川水門を閉鎖することを指示、そして津軽石川水門へ向かいました。私は 1 人、津軽石川水門で降りて、14 時 55 分頃ですか、自分は水門の中へ入ったわけでございます。片方の車には、他の水門扉門を、 3 ヶ所あるわけですが、その水門の閉鎖に向かわせました。

これが津軽石川水門の制御室の遠隔装置でございます（図 04）。ここに遠隔装置でもって降下する一斉降下、あるいは大津波警報の発生放送する機材がございます。ただ当日、この機材が施行されないと

図 05

いうことか、動かなかったのです。普段であれば、マニュアルどおりにスイッチを押して、自動で放送される水門閉鎖放送が始まるわけなのですけれども、水門の閉鎖放送が始まらないと、一斉降下操作のスイッチが入らないというような装置なのです。放送が約 7 分かかるのです。大津波警報が発令されましたので、今から水門を閉鎖しますから、水門上に人はいないでくださいというような放送がされまして、それが放送されないと自動降下がスイッチを押しても降りない、と…。

一斉降下を断念し、水門の上屋にある個別に手動で降ろす水門のスイッチがあるというのを聞いておりましたので、これが大津波警報の放送スイッチです（図 05）。これがスイッチを押しても、全然起動しない。全然遠隔装置の方は動かないということで。上屋の方に行って操作をするというのは、今までも訓練していたのですけれども、訓練では確かに自動降下は降りました。ところが、この間の地震の時にはそれが一切機能しなかったということでございま

図 06

図 07

して。それで私は上屋から操作しようと、制御室から水門の上屋の方へ移動するということを判断し、そして制御室から出た時に、ちょうどポンプ車が他の水門閉鎖を終えて制御室に向かってきたのです。それが大体15時15分頃。45号線沿いの上屋にスイッチがあるということを聞いていたので探したのですけれども、そこにはスイッチはない。２号上屋の方へ行ってスイッチを発見し、何とか降下をさせることができた。

これが上屋の方のスイッチです（図 06）。ここで上げ下げをするのですけれども、途中で止まって、動かなかったのです。このスイッチを、降下スイッチを押して、この扉を閉めますと、自動降下が止まる仕組みだったのです。何で止まるのか、操作の方法も聞いてないし、何の訓練も受けてなかったので、何が何だか分からないと。たまたま、この扉を開けたり閉めたりしているときに、ここの表示が遠隔になったり手動になったり、切り替わることが分かった。この扉を開けたままでなければ降下できないと、いうのが分かったわけなのです。

そして１門を閉めて、２門目は、上屋に上がった団員とともに、この締め方で降下させてというようにして、１号建屋から７号建屋まで随時閉めていったわけです。その時間が、だいたい 15 時 25 分ぐらいで降下が終わったわけです。

その時に７号水門のキャットウォークから宮古湾入口を見ると、閉伊崎（へいざき）付近の雲行きが悪い、何かおかしいというのを感じまして、もしかして大津波かと思いまして、団員に国道 45 号線の水門に移動するように指示し、キャットウォークを１号水門に向かって走っていた。１号水門に到着したとき、宮古湾の方を見ると、高浜・金浜という集落があるわけなのですけれども、高浜方面で水飛沫が上がるのを見た。津波の到来を感じました。ですが、それから高台に避難するには時間的に間に合わない、下手をすれば、波に飲み込まれる危険性もあるということで、その上屋に留まることにし、もう１人の分団員とともに上屋に避難することを試みた。

これがそのときの写真でございますが、この堤防の高さが 8.5m ございます（図 07）。画面奥のここの水門、土谷川水門と言うのですけれども、これは浜の方の突端にあるんです。この水門の高さが大体 12m ぐらい、水面から 12m ぐらいあります。

ここからちょっと動画をご覧になってください。

津波襲来、これが第１波の津波の襲来です。この後が、さらに２波・３波の津波でございます。水門を閉め終わったあたりで、津波が押し寄せてきているのが、こちらからは見えなかったのですけど、見えた時には、間に合わないと。

これが河口なのですけれども。これが、津軽石川に向かってくる津波第１波でございます。その後ろが第２波。この撮影は水門上にある監視カメラの映像でございます。ここにも第２波が。これが非常に大きな津波でした。もう、運動公園の 8.5m の防波堤を乗り越えています。

ここが、今、画面の下の方が水門上屋の位置でございまして、その上にカメラがございますが、だんだんカメラにも近くなってきているのです。このときに非常に大きい津波を感じ、我々は建屋の屋根に避難しました。ここにぶつかっている、ここが大体 12m くらいの高さでございます。さらに大きいのが、こっちにあるのです。

これがもうひとつ土谷川の方から撮りました動画でございます（図 08）。だいたい時間が 15 時 29 分。第１波がこれですね。第２波はこれ。この波がこの堤防も超えてくるのです。

図 08

図 09

土谷川から見ました、現在の位置でございます。

この辺も津波後の状況でございます。

この時間が大体 10 分から 15 分くらいだと思うのですけれども、この襲来が続いたあと、15 時 50 分頃ですか、津波が収まって上屋の屋根の方から降りて、そして建屋に戻って、水門を全閉鎖してるものですから、水が退けないということで、水を退くことを試みました。

水門の開放を試み、各水門にガソリンエンジンの巻き上げ機があるので、それで上昇させようと思ったのですけれども、７門それぞれにある巻き上げ機の３門で操作を試みましたが、どれもこれも作動しないということで、開放をあきらめたわけなのです。

１号建屋に戻りましたら、１号建屋の方に照明用発電機が１機、それから、もうひとつ大きな発電機があったのです（図 09）。それでその発電機は何の発電機なのかと思い、開けてみたら動力用の発電機でした。その発電機を何とか始動してみましたら、各水門に電気が通りまして、巻き上げ機を動かすことができて、その水門を、１門から、１門・２門・３門までは 30cm ずつ、４号・５号は川底になる関係で 50cm 開放し、６号・７号も同じく 30cm 開放し、そして河川内にある津波の海水を何とか水面から開放しました。

これがその発電機です（図 10）。この発電機が、動力用発電機だということも、そもそも、我々消防団には、こういうものがあるということも聞かされておりませんでしたし。これが手動操作用の発電機なのですけれども。

エンジンをかけて、ひとつひとつ下ろすことになっているのですが、巻き上げ機があるということも聞かされておりましたし、今まで１回も始動をさせたこともございません。配電盤についても、切り

図 10

換えスイッチがあるということも、初めて知ったんです。だから、トラブルがあるときはトラブルが続くのかな、と我ながらそのときは、そう感じました。

水門を開放した状態で、４時半頃まで河川監視をしておりました。そうしていると、金浜・高浜の方から４、５人の作業員が 45 号線を歩いてきました。「あなた方どこから来たの」と聞くと、「高浜から来ました」と。「高浜も大変な被害です。私たちは下水道工事をやっていたのですけれども、重機も流されれば、車も流され、何もなくなった。帰る車がないので、歩いて帰っている」と言うようなこと。「金浜も大変なことで」と言う。「どこまで行くの？」と言うと、「山田まで行きます」と。山田まで行くとなると大変だな。でも、山田まで行くのであれば、歩いていくしかない。作業員の方々は立ち去ろうとしていたのですけれども、その時、水門閉鎖へ一緒に行ったもう１人の分団員に対して、作業員の方たちと一緒に行って、暗くなるのでとりあえず懐中電灯を持って、津軽石地区や学校避難所の状況確認や

津波来襲　15時33分34秒
水門制御所2階より水門方向

図 11

津波来襲
現　在
水門制御所屋上より東方向

図 12

津軽石地区
被災前
被災後

図 13

図 14

図 16

図 15

図 17

安全確認をしてから迎えに来い、という指示をしました。もし、もう一度津波が来るようなことであれば、自分はここにいて閉鎖作業をするから、とりあえず屯所に戻って懐中電灯を持って、分団員２、３人連れて戻ってこいということで帰したわけなのです。１人で行かせることは大変問題がありそうだったので。そのままその建屋に１人残って、いつ迎えが来るのも分からないまま待っていました。

夜暗くなってから、45 号線を今度は津軽石方面から金浜の方面に歩いてくる方が３名ほどいたのです。「これから先は、とりあえず被害が大きいようで、水もあるようだから気をつけて行かないとだめですよ」ということで指導したのですけれども、「何とか行ってみる」ということで行ったのですけれども、「行けなかった」ということで戻ってきました。

津波襲来の 15 時 33 分、津軽石方面に向かう橋があるのですが、橋のところまで津波が襲来しておりました（図 11）。これが重茂方面へ行く橋で「稲荷橋」という橋なのですけれども、ここに水門がございます。この水門も何とか壊されないで済んだのですけれども、この橋より津波の方が高かったと。これが河川なのです。

これが津波襲来のとき、こっちが現在（図 12）。45 号線も通行不可能になっております。

衛星から見た津波襲来前の様子。こちらが津波襲来後の状況でございます（図 13）。この辺も家がなくなっています。

津軽石川を挟んで、赤前・津軽石と別れているのですけれども、赤前地区の被災前でございます。

この辺が全然家がございません。

45 号線には、家の２階部分が打ち上げられています（図 14）。

これが津軽石の駅前に停車しておりましたディーゼルカーが押し流されて、くの字になっています（図 15）。

ここが水門、ここがひとつの集落で、鉄道がここを通っていたわけです。ここが 45 号線（図 16）。

これが水門の位置で、津波の水位はここまで到達してございます（図 17）。

図 18

図 20

図 19

図 21

ここが川向かいの栄通り地区の被害状況でございます。２階が飛ばされています（図 18）。

こういう状態、海水が入ったまま、水浸しになってございます（図 19）。

当時の水位の状況がここまで、２階建ての家が残ったのですけれども、ここまで水が入ってきた（図 20）。

次の日、12 日から、早朝、生存者救助のための活動です（図 21）。盛岡西消防署レスキューと宮古市消防団 20・21・23、津軽石地区には、４分団があるわけで、赤前地区の分団は赤前地区を、津軽石地区の方を 20・21・23 分団、合同で救助をしました。

これが救助している状況です（図 22）。まだ水位が下がってないということで、土谷川水門の上げ下げは 22 分団が管轄だったので、救助に行くにも、こういう状態で水が抜けてないからと、22 分団の方へ連絡したのです。「水門の開閉どうなっている？」ということで。水がいっぱいで、水門まで行けないので、もし 20 分団の方で開放できるのであれば、開放してくれないかということで連絡がありました。この水を抜かないと赤前の方は何もできないと連絡を取ったら、そういう依頼を受けました。津軽石川水門から分団員４名で土谷川の水門に向かった。津軽石川水門と同じく小さな引き上げ機があるのですけれども、その巻き上げ機もエンジンの始動ができなくて、水門の開放は無理かなと思ったのですけれども、配電盤を見ましたら、配電盤に動力電気が来ていることが確認できまして、それで開放することができました。２門ある水門なのですけれども、１門は流木がかかって一切だめ。

それで、２門目の方を 1.5m 開放して、なんとか開放して水を出すことができた。午後の１時過ぎには１m くらいにまで水位が下がったので、遺体捜索・救助活動もできるようになり、自力で避難することもできるようになりました。なんとか排水もうまくいったということでございます。

次の日の３日目、13 日は早朝から遺体捜索でございます。陸上自衛隊が我々津軽石地区にも来たのです（図 23・24）。

図 22

図 23

これが遺体捜索。捜索中にも、津波警報が発令されると、避難してという状況でした。

水門の開放の高さはそのままの位置で、物が海の方へ出ないようにしておきました（図 25）。

図 24

図 25

屋根を壊しての捜索をしたりもしました。

以上を持って、宮古市消防団 20 分団の活動記録の報告を閉めさせていただきます。

ありがとうございました。